



お泉水

第5回福井県図書館活動研究大会分科会ならびに全体会議記録(要旨)

題 字 福井大学学長 清水 英 夫

№.6 1976. 3. 31 福井県図書館協会報

第1分科会

研究テーマ 小・中・高校生に対する図書館奉仕
—武生市立図書館夏休み子供図書館—

事例発表者 武生市立図書館 加藤良夫

司会者 福井県立図書館 広部英一

【事例発表要旨】

- 1 開設にいたる経過 生徒が夏休みの宿題のために、市役所に押しかけるので、数年前から中央公民館で統計教室を開いている。今年は市民ホールが夏休みの期間解放されているので、その利用法の一つとして、子供図書館を開設することになった。
- 2 関連機関との相互協力 校長会で図書館の実状を説明し、夏休みの宿題を図書館に報告してもらい、図書館を利用しなければできない宿題をピックアップし、一覧表を作成した。
- 3 企画について 市役所企画広報課が中心となり、自主学習・読書コーナー・夏休み統計教室・親子教室・郷土歴史教室・子供読書会・植物採集会・採集品の名前を聞く会を設ける。
- 4 PRについて 市広報に載せ、各学校にも連絡をする。
- 5 運営について 館内閲覧票を利用し、図書館の本を子供図書館へ持ち込みを許可。
- 6 成果と課題 当初、子供図書館ができると図書館利用者が減るのではないかと心配されたが、実際には利用者

福井市宝永3丁目11-16・県立図書館内 福井県図書館協会

も例年より増加し、子供図書館と図書館とを合わせて、1日平均約700名の利用があった。

課題としては、資料の作成があげられる。現在、子供向けの郷土資料や歴史資料などが特に不足している。県立図書館が資料の作成や収集をし、各図書館に貸出しをしたらよいと思う。また、資料作成のための人材を登録したらよいのではないか。

【討議要旨】

公共図書館の奉仕活動には、住民から自然に起こってきた要求にこたえる消極的活動と図書館から利用者を発掘していく積極的活動があるが、この2つの要素を組み合わせる必要があると思う。また、より密な奉仕をするためには公共図書館と学校図書館が連携していかなければならないが、今の学校では図書館を利用するような学習を実施していなくて、夏休みだけ図書館を利用しなければならないような宿題を出しているところに問題があるのではないか。県立図書館と市町村立図書館の機能分担については、県立図書館は基本的には“図書館の図書館”として資料の援助(録音テープの充実・新刊書の選定及びリスト作成など)や人的援助に力を入れ、各図書館との交流をはかってほしい。さらに、福井県の図書館設置数を考えてみると、“図書館の図書館”としての機能だけでなく、直接サービスをも実施してほしいと思う。

第2分科会

研究テーマ 今日における図書館活動の役割について
—図書館の再発見のために—

事例発表者 福井市立図書館建設準備室 加藤昭雄

司会者 福井大学附属図書館 瓜生守邦

〔事例発表要旨〕

図書館とは、市民の文化性をたかめる中心であり、自由意志での自己教育の場であると考えている。そのためには、貸出しを中心とした気軽に利用できるという面を重視しなければならない。ところが従来の古い図書館では、一番重要な仕事は閲覧であり、保存であったが、前出の理由から、現在は一番基礎に貸出しがあって、閲覧という部分は、レファレンスだという考え方に立っている。こういう考え方に立った図書館において始めて市民に役に立つ存在であるとの認識を与え、さらに市民の潜在的な要求を引き出す力になると考える。

〔討議要旨〕

1 市立図書館の建設を契機として、全県のマスター・プランを進めてゆかねばならない。つまり、各種図書館間の相互協力・資料の分担収集・保存等の機能調整の具体化を推し進めていくことであり、また、地域住民との密接なつながり、潜在的な要求への対応などを考えていく場合、すぐ近くに図書館があるという状況が不可欠であることから、全県のマスター・プランに基づき公共図書館建設を促進していかねばならないということである。しかし、予算、その他の事情から、さしあたり公民館図書室の充実をはかる必要があると考える。

2 貸出しを盛んにすることが、図書館の再発見というテーマにつながると考えるが、そのためには、収書方針の検討、広報活動の充実を計らなければならない。

第3分科会

研究テーマ 読書グループ活動を発展させるための方策について

—読書グループ実態調査にあらわれた問題を中心に考える—

事例発表者 福井県立図書館 三上須美

司会者 大野読書会 坂田玉子

福井女性読書会 吉田米子

〔事例発表要旨〕

まず最初に県立図書館の三上主事より県下読書グループ実態調査の結果報告がなされ、次の4点が問題提起された。

- 1 若い人たちの読書グループが非常に少ないが、若いひとたちの読書グループを育成するにはどうしたらよいか。
- 2 読書会のテキストはほとんど県立図書館・分館・配本所から借りているが、これには限度があるので、文庫本などを購入して、テキストの内容の幅をひろげていく

ことは出来ないか。

3 読書会の会場には、図書館や公民館などの公共施設の利用が望ましいと思うが、グループの3割は会場に会員宅を使用している。その利便についてはどうか。

4 読連協の組織があることを知らないグループがあるが、読連協をどのようにPRし、読連協への加入をすすめたらよいか。

〔討議要旨〕

若い人のグループが少ない点については、若い人にはグループをつくって本を読むということより、ほかに魅力のあることが多くある。また、読書会に入っている、結婚するとほとんどの人がやめていく。しかし、現在の文庫本ブームでもわかるように、若い人も自分で本を買って読んでいる。決して読書をしないわけではない。しかし、この若い人達を組織化していくということは非常に難しいので、重点を婦人層に向けてはどうだろうかという意見が出されたが、やはり、レクリエーションを含めたり、多角的な運営で粘り強く若い人のグループを育成していこうという結論になった。また、テキストについては、やはり「かたらい文庫」の利用が良いという声が多く、会場使用は、会員宅は便利ではあるが迷惑をかけるので、なるべく公共施設の利用を心がけているが、市町村により会場使用料を取るところがあるので、その点が難しい。読連協については、こういう組織をつくっていると励みになるので、新しいグループができた場合、読連協への加入を勧めて、みんなで協力しあっているということになった。

全体会議

議長 福井大学附属図書館 清水 啓

〔分科会報告〕

第1分科会 小中高校生に対する図書館奉仕 武生市立図書館夏休み子供図書館の紹介があり、それに対する討議が行われた。

子供図書館は、夏場の市民ホールを利用して開設されたが、それまでには、関連機関との相互協力で、事前打ち合わせも十分行われ、きめ細かな企画で実施された。

PR、運営とも広範囲の協力を得、子供図書館の利用が多かったのはもちろん、市立図書館の方まで利用率倍増という成果を得た。

子供たちの夏休み宿題への資料提供に主眼をおき、あらかじめ学校の宿題を調べて資料をそろえたが、それでも資料不足という問題が生じてきた。そこで、今後の課題として、広い範囲の協力で資料の自館作成を行うこと、資料リストを作成すること、資料作成のための人材登録を行うこと、また、図書以外の資料作成も必要であることなどが挙げられた。

第2分科会 今日における図書館活動について 福井市立図書館の構想が紹介された。貸出しを中心に、全県

的マスタープランで運営したいということであった。全県的マスタープランとしては、図書館をふやすこと、行政資料・新聞・雑誌などの収集保存を各市町村で分担して行うことなど。

金、人を行政的に充実して、貸出しという奉仕に専念すべきであり、そこに図書館の再発見がなされるであろうことが確認された。

第3分科会 読書グループ活動を発展させるための方策について 読書グループ実態調査に現われた以下4問

題点を中心に、討議が行われた。

①若い人たちの読書グループが少ないが、彼らが読書をしていないのではなく、ただ組織化されていないのであるとみられ、組織化の方法とし宿泊読書会などの例が出された。②テキストの幅を広げるために、文庫を増設してほしいこと。③読書会会場として公共施設を気楽に使えるようにしてほしいこと。④読連協の組織のPRにつとめてほしいことなどが話し合われた。

福井県図書館協会の歩み

昭和50年 (1975)

- 5. 23 理事会・総会 (福井県職員会館)
- 9. 23 理事会 (福井県職員会館)
- 10. 29 第19回読書感想文県下コンクール審査委員会 (福井県立図書館)
- 11. 9 第5回福井県図書館活動研究大会(県民会館)
講演：橋崎通元老師「現代と道元禅」3分科会にわかれて研究協議

- 11. 9 第19回読書感想文県下コンクール表彰式
- 12. 16 理事会 (福井県職員会館)

昭和51年 (1976)

- 3. 15 昭和50年度県下図書館関係職員研修会 (福井大学附属図書館)
- 3. 31 協会報第6号発行

創文堂印刷株式会社

福井市日之出3丁目3番29号
TEL・22—1313 (代表)

文化の泉

勝木書店

福井市中央1丁目4番18号
TEL・24—0428 (代表)

品川書店

福井市順化1丁目1番19号
TEL・24—0112 (代表)

福井県青少年課推せん図書
寝ころびながらでも読みこなせる本

よみもの福井史

青園謙三郎 著 水上勉 序
ひまわり書店発行

ひまわり書店

福井市中央1丁目1番7号
TEL・22—5540 (代表)

曾野綾子著『絶望からの出発』を読んで

大河 たづ子

絶望からの出発…この本の題名にひかれながら読み始めたが、「あっ」という間に読み終えてしまった。そして、もう一度読みなおしてみたくなり、また、繰り返し読んで読み出した。こんなふうにして、繰り返し読みを三度もする程、夢中でこの本を愛読した。

それは、私が教員であるために、今、迷っている事、求めている事の問題を、作者が体験を通して書いているので、胸にせまるものがあつたからだと思う。多くの児童の顔を浮かべて深く掘り下げてみたが、その以前に1人の母親としての立場に立って、この本を読んだら、大きな指針をいくつも与えてくれて、本当にすばらしいおかあさんになるだろうと思った。

先ず、教える前に親や教師は自分を正しているか。子供には、テレビを見ることについて、やかましく言っている親がドラマ番組にしがみついているではないか。ここまで読んだ時、大人と子供との違いがあるのではないかと反論もしてみたが、読み返しているうちにもっと根本的な面にふれることができた。

それは、子供に教育が必要ならば、親にも教師にも、それ以前に教育が必要な事である。教育の技術だけに走って、ただ知識のみを教えて行きはしないか、大人の顔をしているだけになってはいないだろうか。深い反省に立ちながら、次のことばを心の中にきざみこむようにして何度も読んだ。

“教育の根本の姿は自らを教育し続けることなのである。生きる限り、（完成しないことを知りつつ）自分を自分の理想とする方向へ1歩でも近づけようとする行為から、すべての教育は始まるのである。”

そして、作者は、己れを教育しようとしないうちに、教育は不可能である、ということを感じている。しかし己れを教育しても、更に教育はまちがなくなると行くとは限らない。私はこのようにして絶望的な出発点に立つのである、と核心にふれているが、私は、ここまで自分自身を正して事にあたった時、結果がうまくいかなくても絶望的にはならないと思った。

絶望という全く望みがなくなってしまつて立ち上がることができないように思う。むしろ、児童の心にふれるので、今、うまくならなくても、何時かはうまくなるものであると信じてじっと待ったり、また他の方法を考えたりする。これは教師としての立場で考えるからであろうか。否、自己肯定の顔であろうか。この本を読んでもっともっと視野を広めていくと理解で

きるかもしれない。

次に、しつけは家庭でしかできない。しつけは元来家庭のものである。その家の生活に対する嗜好・価値感などが、きめ細かく加味されるべきであつて、1たす1は2というような画一的なルールがないのである、と作者は言っているが、私は全く同感である。この頃のしつけは、学校へ依頼されることが多い。“先生のいうことならよく聞くのです。”と云って、「はなを、かむように。」とか、「はをみがくように。」とかいろいろと言われる。こんな時どうして、子供といっしょにやれないのか、母親失格ではないか、と残念に思う。すべてが便利になってきた世の中であるせいも、掃除なども、ぞうきんのしぼり方、ふき方、ほうきのはき方など、どうしたらよいのか、正しくできない児童が高学年にいるのを見受ける。また、作業を好まない児童が目立ってきていることも考えなければならないことである。しつけは本来、手間ヒマがかかるものである。初めは、親がやってしまう方が時間的にもずっと早い、ということが多い。それをあえてめんどうでも子供にやらせるというのは、一種の保険をかけておくことと似ている、と作者は言っているが、実にうがった表わし方であると楽しく読んだ。

しつけの第2は、対外的な言語や、行動である。家庭のしつけの最大のもは、言葉遣いである。戦後の民主主義は、何人も人権上平等だからということで、尊敬する必要はなくて、貧しい人間関係を作ってしまった。ここまで読んだ時、敬語を正しく使っているだろうかと先ず自分自身の反省をした。親しみやすいことは勿論大切であるが混同してはならないことである。敬語の背景には、他人に対する根源的な尊敬をこめた関心、自分の能力に対する謙虚さが必要とされる。私はここでも教えることの原点にふりかえってみることができたことを喜んでいるのである。

作者のご子息を例にとられての実感的教育論は、本当に心にしみるものが多く、終わりまでの1つ1つについて書くとまだまだ枚数が足りなくて惜しい気がする。

私は、このあと、多くの同人と語り合う機会をみつめて、ぜひ話し合いたいと思っている。まとまりのない感想文でお恥かしい次第ですが、1年3組に読書をすすめている担任の子供と共に歩む姿を想像していただきたい。(福井市つくも2丁目9の18)